

アンティゴヌ、最後の事件

浅谷真弓

はじめに

ロトルーは古典古代作品に取材して、『メネクム』(1630/1632)、『死にゆくエルキュール』(1634)、『ふたりのソジー』(1636-37/1637)、『アンティゴヌ』(1636-37/1638)、『捕虜たち』(1638/1638)、『イフィジェニー』(1639/1640)の六作を書いている。こうして並べてみると、1629年から1649年までの全創作期間中、前半十年に喜劇と悲劇が交互に現れることがわかる。喜劇は、生き別れのメナエクス兄弟、奴隷ソシウスとメルクリウス神、捕虜となった兄弟、主人と奴隷など、さまざまな位相の下に取り違えの妙を見せた。この世に「わたし」はたったひとり、という当たり前のように聞こえるテーマに挑んだ作者は、カードゲームの興奮の中で、札の表裏に隠された見えざる神の手に触れたのかもしれない1)。哲学的論文、対話ではなく、詩や物語でもない、舞台でしかできないこと。古典古代喜劇がこの作者に与えた演劇の可能性と限界は最後の喜劇、『妹』(1642-47)となって現れる2)。喜劇作家ロトルーの死は多くの相続人を前に、過渡期の一人として応分の努力をした末の大団円と評価すべきところだ。では、形式上でさえ、永年にわたって悲喜劇との曖昧な境界をさまよいつづけた悲劇はどうか。死にゆくエルキュールが幕開けを告げた後、古典中の古典、定番、アンティゴヌが登場する。彼女の振り返った先にはセネカ、エウリピデス、ソフォクレスがいる。これらの名前が何を意味するか、余程の脳天気でない限り、劇作家なら誰でも知っている、そういう時代に生きて、最初の挑戦だからと言い訳のきかない立場に身を置いた。アンティゴネは悲劇作家の資格を試すには相手に取って不足のない対象、それどころか失敗すれば次がない、最後の作品となるだろう。ロトルーの古典古代悲劇第二弾、『アンティゴヌ』は誰のためでもない自分自身のプライドを賭けた、しかし、笑うべき無謀な挑戦だったのか。

I. オエディプスのディレンマ

ヴィオレール・デュックによれば、アンティゴヌは、ソフォクレスの『アンティゴネ』とエウリピデスの『フェニキアの女たち』の古典古代的単純さに飽き足らなかった作者が、セネカの『テーバエの女』(邦訳、『フェニキアの女たち』)の力を借りてフランスの舞台に登場させたことになっている3)。詳細な比較検討は先行研究に譲り、ここで四作品の簡単な対照表を作っておこう4)。

エイコス XIII

登場人物

ソフォクレス: アンティゴネ、イスメネ、クレオン、ハイモン、ティレシアス、エウリディケ、しらせの男たち、コロス

エウリピデス: アンティゴネ、イオカステ、オイディプス、ポリュネイケス、エテオクレス、クレオン、メノイケウス、ティレシアス、老僕、コロス

セネカ: アンティゴナ、イオカスタ、オエディプス、ポリュニケス、エテオクレス、しらせの者、侍臣

ロトルー: アンティゴヌ、ジョカスト、エテオークル、ポリニース、イスメヌ、クレオン、エモン、ティレジー、アルジー、アドラスト、その他

共通関係図

第一世代

第二世代

オイディプス

エテオクレス ポリュネイケス アンティゴネ イスメネ

イオカステ

クレオン

メノイケウス

ハイモン

エウリディケ

アドラストゥス

アルゲイア

ティレシアス

開始時点

ソフォクレス: オイディプスが長年の流浪の末に昇天、アンティゴネは妹イスメネとテーバイの都に戻った。イオカステも既に亡く、エテオクレス、ポリュネイケス兄弟は王位争いで死んだ。クレオンの長子メノイケウスがテーバイの犠牲になった、それから

エウリピデス: エテオクレス、ポリュネイケスの兄弟対決の最中。オイディプス、イオカステは未だ存命

セネカ: オエディプスのアンティゴナに対する昔語り。次の場面でイオカスタが登場し、彼の失踪から三年経過したと言う。兄弟対決のはじまり

ロトルー: エディプは既に亡い、兄弟対決のはじまり

終了時点

ソフォクレス: アンティゴネの処刑に続くハイモン、エウリディケの自殺

エウリピデス: ポリュネイクスの埋葬拒否、オイディプス、アンティゴネの追放、亡命

セネカ: エテオクレスの呪われた王権相続、来るべき破滅の予言

ロトルー: アンティゴーン処刑、エモン自殺

経過

ソフォクレス: 1/アンティゴネ、イスメネ現状説明、アルゴスが去った後、ポリュネイクス埋葬拒否、エテオクレス埋葬 2/クレオンによるポリュネイクス埋葬拒否の正当化、アンティゴネによる秘密の埋葬 3/埋葬発覚、姉妹の処刑決定 4/ハイモンとクレオンの葛藤 5/アンティゴネ処刑、ティレシアスの予言、ハイモン、エウリディケ自殺

エウリピデス: 1/イオカステ現状説明、アンティゴネ、ポリュネイクス、エテオクレスの対決、女たちの仲裁 2/クレオンの対アルゴス戦況報告、ティレシアスの予言 3/メノイケウスの自己犠牲 4/アンティゴネの仲裁、兄弟の死、イオカステ自殺 5/オイディプス追放、アンティゴネ亡命

セネカ: 1/オエディプス現状説明 2/オエディプス失踪から三年後、イオカスタ現状説明 3/アンティゴナとイオカスタが兄弟を説得、仲裁、ポリュネイクス再出発、エテオクレス呪われた王権相続

ロトルー: 1/ジョカスト不吉な目覚め、アンティゴーン戦況報告、メネセの死のレシ、エテオクルとクレオンの葛藤、ポリニースをめぐるアンティゴーンとエモンの葛藤、ポリニース、アルジー夫妻の別れ 2/ポリニース、アンティゴーン、エテオクル、ジョカストの葛藤 3/ジョカスト自殺のレシ、エモン、アンティゴーンの嘆き、アンティゴーン、イスメーヌ姉妹の対立、アルジー、アンティゴーンの対面、同調 4/クレオンの相続の正当化、アンティゴーン、アルジーの謀反 5/エモン、クレオンの対立、ティレジーの予言、アンティゴーン処刑、エモン自殺、クレオン昏倒

主要問題と決着方法

ソフォクレス: 埋葬をめぐるアンティゴネとクレオンの対立/アンティゴネ処刑

エウリピデス: 1) 兄弟対決、2) 埋葬をめぐる対立/兄弟の死、オイディプス父娘追放

セネカ: 兄弟対決/亡命、相続

ロトルー: 1) 兄弟対決、2) 埋葬をめぐる対立/兄弟の死、処刑、自殺

付随的事情

ソフォクレス:対アルゴス戦、アンティゴネとクレオンの息子ハイモンの恋愛関係

エウリピデス:対アルゴス戦、クレオンの長子メノイケウスの自己犠牲、アンティゴネ、ハイモンの恋愛関係

セネカ:オエディプス失踪

ロトルー:対アルゴス戦、メネセの犠牲、アンティゴヌ、エモンの恋愛関係

ざっと眺めれば、『アンティゴヌ』は登場人物、物語の構成ともにエウリピデスにその殆どを負っている。構成上単純なのはむしろセネカで、人物数が端的に示すように、兄弟の対立が母娘の仲裁によって亡命と相続として平和的に解消される。少なくとも舞台上で死者が出ることはないし、死のレシもない。時間に沿って並べて見よう。

1 行目:場面設定、街道の道すがら

オエディプスの昔語りがアンティゴナの三度の相槌を交えて、登場から 318 行にわたって続く。次の同じ事実をアンティゴナの相槌をきっかけに四度、他の表現で重複的に述べる。1)これから向かう死地の来歴を含めた描写、2)自分が過去に犯した罪、3)その結果生じた現在の不幸。この繰り返しには、韻文技術の見せびらかし、コードが不完全な観客の説得、老人の特性の描写などの効果が考えられる。四度目のオエディプスのセリフが知らせの者の登場を準備する。

87 行目:ウェルギリウス、『アエネイス』の引用、唯一の救いは救われないこと。敗者にとって、命を救われないこと、死の方が生の苦痛を味わうより解放、救済となる 5)

318 行目:知らせの者の報告

現在のはじまり、筋の展開とともに、オエディプスの不吉な予言、退場

363 行目:場面転換、城壁のうえ

イオカスタの昔語りはオエディプスの語りを彼女の側から補強、修正する事実確認で、実質的には同じ内容をまた繰り返される

387 行目:侍臣の現状報告

406 行目:アンティゴナの仲裁のすすめ

426 行目:イオカスタ退場

444 行目:場面転換、野営地、イオカスタの説得開始

476 行目:ポリュニケスの返答

480 行目:イオカスタの説得、昔語りと現状の嘆き

496 行目:エテオクレス、無言で剣をおさめる

497 行目:イオカスタの説得続行

586 行目:ポリュニクス再返答

599 行目:イオカスタの裁定

亡命者ポリュニクスには新天地を求める戦いを、エテオクレスには王位を与える。オエディプスの逆説、救われないことが唯一の救い、が想起される場面。祖国から追われたように見えるポリュニクスは呪われた王国の軛から解き放たれ、自由を得る。戦って勝てば名誉は自分のものである。一方、王位を相続するエテオクレスは権力とそれに付きまとう憎しみをも父から受け継ぐ。王位継承の事実に限っては救われたように見えるが、破滅が予言されているため、この救済は来るべき不幸の同義でしかない。名目上の罰(追放)が救済であり、同じく救済(相続)が厳罰となる。以下、最終行までイオカスタとエテオクレスが権力と憎しみをめぐって交わす対話がこのことを論証する。

660 行目:イオカスタの結論、憎まれる権力は永続しない

665 行目:エテオクレスの結論、権力はどんな代価を払っても見合う

イオカスタの主張がオエディプスの破格に長いと思われるプロローグによって補強されていることはまちがいない。既にイオカスタは二代にわたって空位時の王の代理人を務め、ドラマの中ではオエディプス退場後、実質的に彼の役を演じてきた。エテオクレスの破滅の未来はオエディプスが既に生きた過去が実証している。呪われた権力は相続され、循環するだろう。オエディプスは自身の不在、積極的不介入によってドラマの原動力となり、圧倒的な存在感を示すことになる。ここで再び観客はウェルギリウスの引用、救われないことが唯一の救い、に連れもどされる。直感的には把握可能なこの詩句の意味は論理的には多少複雑である。いま、一般論を a、オエディプスの価値判断を b としてその道筋を整理してみると、

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| a 1 生きることは良いことだ | b 1 死は望ましい |
| a 2 最大の処罰は死である | b 2 最大の処罰は生である |
| a 3 処罰は報復である | b 3 処罰は償いである |
| a 4 = b 1 死は望ましい | b 4 = a 1 生きることは良いことだ |
| a 5 = b 2 最大の処罰は生 | b 5 = a 2 最大の処罰は死 |

オエディプス自身の罪の評価が死をもって贖う限界を越えている(これを b 0 とする)ため、死はむしろ救済と同義であり(b 1 ウェルギリウスの引用)、救済されないこと、すなわち生きることが最大の処罰である。しかし、敬虔なアンティゴナの説得を受け、自殺を思い止どまった彼にとって処罰は償い(b 3)でもあるから、苦悩の分だけ救済に近付くことができる。次に、処罰の意図を一般論に置いてオエディプスを罰する(a 3/a 4)なら、a 2の結論を選ぶべきだが、それではみすみす b 1の願望をかなえさせてしまう。どちらに

しろ、オエディプスは救済されてしまう。a bの二重規範を満たし、循環を断つ方策がないことは上に見たとおりで、同じく、エテオクレスの主張をA、イオカスタの主張をBとすると、

- | | |
|-----------------|-----------------|
| A 1 エテオクレスは正しい | B 1 エテオクレスは不正だ |
| A 2 エテオクレスには報酬を | B 2 エテオクレスには罰を |
| A 3 王位は良いものだ | B 3 王位は呪われている |
| A 4 繁栄の約束 | B 4 破滅の予告 |
| A 5 エテオクレスには王位を | B 5 エテオクレスには王位を |

であり、B 5 = A 5 が A 1 を阻止するには、B 3 / B 4 が確実でなければならない。仮に、イオカスタ = オエディプスを根拠にして A B を a b の枠のなかで解消するならば、a 1 生きるとは良いことだ、が A 3 王位は良いものだ、に代入できるだろう。B 1 / B 2 にならって王位を与えない決定を下すと、b 1 死は望ましい、と同様の結果を生む。オエディプスが死を経ずに救済に近付くためには、より長く生きて償う必要がある (b 3 / b 4) から、償いの代理人を立て、a 5 = b 2 = B 5 エテオクレスには王位を、が最良の選択となる。エテオクレスは論理的にもオエディプスの相続人に指名される。勿論これは仮定の話にすぎないが、このような論理上の操作を構成の単純さと対比的に捉えることは可能だろう。説得的であり、かつ二重規範になじむこと。『テーバエの女』は未完成を疑われ、レーゼドラマの側面を持つ作品であるが 6)、オエディプスのディレンマをイオカスタ、エテオクレスの論争に導入した場合には、彼の救済をめぐる論証として一応の完結をみる。言うまでもなく、読者にとっては冗長でしかない三度ないしは四度にわたるオエディプスの昔語りや舞臺で果す役割は変質する。全体が来るべき不幸の予告編に終始する印象は、事件発生を回避しながら、見る者の論理にきわめて具体的に訴えかける戦略の結果なのだ。恐怖の根源は死の周辺に準備されて到達できない。オエディプスとエテオクレスの舞臺上の身体を越えて先送りした救済が観客に託される時、生きながら残虐な苦痛を味わい、未知の脅迫を受ける相続者が現れる。登場人物の殆どが死んでしまうロトルーの『アンティゴヌ』とは、このような意味で、まったく対照的である。

II. ポリニース ≠ ポリュネイケス

セネカのアンティゴナは構成上は単純明快、論理的には多少複雑であるものの、舞臺作品の体裁を保つに足る要件を備えていた。しかし、これでは校訂者がロトルーをセネカの相続人に指名した理由はいまひとつ釈然としない。エウリピデスは登場人物数がほぼ同じ、構成は複合的で、それだけに全体として筋が整備され、論理が通っているように見える。それに物足りなさを感じて、ソフォクレスのポリュネイケスの埋葬問題に重点を移して再構成したというのなら、納得できる。改めて『アンティゴヌ』の構成要素を整理しておこう。

1) ソフォクレス、エウリピデスによる要素

- 1 劇の開始時点でオイディプスは死んでいる ソフォクレス
- 2 エテオクレス、ポリュネイケスは兄弟対決のさなかにある エウリピデス
- 3 イオカステは生きていて、兄弟の仲裁をする エウリピデス
- 4 テイレシアスの予言とメノイケウスの自己犠牲 エウリピデス
- 5 兄弟の死 エウリピデス
- 6 それに伴うイオカステの自殺 エウリピデス
- 7 ポリュネイケスの埋葬をめぐるイスメネとの葛藤 ソフォクレス
- 8 ポリュネイケスの埋葬をめぐるクレオンとの対立 ソフォクレス、エウリピデス
- 9 アンティゴネとハイモンの葛藤 ソフォクレス
- 10 ハイモンとクレオンの葛藤 ソフォクレス
- 11 クレオンの王位継承 ソフォクレス
- 12 アンティゴネの処刑 ソフォクレス
- 13 それに伴うハイモンの自殺 ソフォクレス

2) ソフォクレス、エウリピデス、セネカにあって、ロトルーにない要素

- 1 オイディプスの予言、その他 エウリピデス、セネカ
- 2 オイディプス、アンティゴネの追放、亡命 エウリピデス
- 3 ポリュネイケスの亡命 セネカ
- 4 エテオクレスの相続 セネカ
- 5 エウリディケの自殺 ソフォクレス

3) ロトルーに固有の要素

- 1 ポリニース、アルジー夫妻の別れ
- 2 アルジー、アンティゴヌの対面、同調
- 3 クレオンの昏倒

前半をエウリピデスに、後半をソフォクレスに負う構成を難点とする 1)か、大団円の説得性を高めるために絶対に必要な手続きと考えるか、意見が分かれるところだろう。どちらにしても、構成要素を見る限り、セネカの入り込む余地はない。ラテン語で書かれたセネカを第一に置いて、その悲劇としての存立に疑問を抱き、エウリピデス、ソフォクレスへとさかのぼったのであれば、話は別である。『テーバエの女』は未完成なレーゼドラマで、舞台上で演じるには不適格な作品だと思われる。この時点でのセネカの名誉は最初の教師であることにすぎない。だが、セネカの要素を内包するエウリピデスだけでも、ロトルーの悲劇を満たすことはできなかつた。そして、アンティゴヌの悲劇はエウリピデスとソフォ

クレスを強引に結び付ける人物の力なしには成立しない。ラテン名ポリュニクス、ギリシア名ポリュネイクス、フランス名ポリニースと名乗る彼が演じた役割は。

ギリシア人はエテオクレスを権力者、専制君主とし、観客の同調をポリュネイクスに置いた。フランス人は前者を民衆に愛される人道的な王、後者を真に忌まわしい人物に仕立てた。これが校訂者の評価である。ロトルーが却下したローマ人のポリュニクスも母親の意見に従えば、王国の呪いを継がせるに忍びない人物だった 2)。

第一幕、第六場に登場するポリニースは義父に向かってテーブの王位継承権を主張し、宣戦布告の正当性を論じる 3)。

それがわたしだ、みすばらしい奴、それがあなたの国でのわたしなのだ、あなたは多くの実力者たちを平穏に束ね、悪しき間借り人のわたしは呪われた土地から恋の名の下に戦いの種をもたらした。あなたの家とわたしが共に掲げた婚礼の炬火は運命に火を点け、あなたがたのすべてを燃え尽くす。あなたは娘の胸に蛇を抱かせ、そいつがあなたの一族を絞め殺すにちがいない。多くの善意、忍耐に報いるに、あまりに卑怯だったわたしは、多くの災いの元凶となった、もうご好意は無用です。後はない、あなたを満足させる時が来た、そして兄とわたしの戦いが最後に、、、なぜそんなふうに青ざめ、震えているのです

戦いに至る事情はこうだ、

- 1) ギリシア(アルゴス)がテーブの脅威となった原因はひとりポリニースのみにあり、
- 2) 亡命者であった彼を受け入れてくれた義父一族にこれ以上の迷惑をかけたくない、
- 3) 好意に甘んじて生きて行くことはプライドが許さない。

だが、すべては妻、アルジーへの恋に始まる。義父はそんな婿を諫め、妻も反対する。

なんだと、何を言い出すのだ、恐ろしい企てだぞ

ああ、あなた、お生まれの声に耳を傾け、ご自分が流そうとしている血がどんなものかご覧なさい、恥も恐れもなく、そんなことをお考えなの

そこで再び、

わたしたちは共同統治の合意を尊重する取り決めだった、裏切り者がそれを犯して処罰されぬままだ、わたしは長幼の序をまもっている、わたしの器はこんな意気地の無い徳を湛えられない、よほどの腑抜けでない限り、そんなことには耐えられまい。いかに気掛かりなアンティゴヌも、わたしの意志を曲げられないだろう

第四の理由は不正を糺すこと。そして、彼は妻を抱き締める。

さようなら、わたしの心がやさしく愛し、天に類い稀な徳を与えられた方よ、永遠の別れがわたしたちを分つだろう。あなたはご自分の苦しみを断つ気概を見せて、わたしに涙を流すような恥をかかせてはいけない。そしてお義父さま、年経て賢明なあなたには別の婿がふさわしいが、せめてわたしの遺骸を土で覆うお心遣いを、死者たちの王国へ抜ける道を開いてください、わたしのからだがかラスたちに盗まれぬよう。どうか、姫さまを大切に、

ギリシアの中でつりあう方を探してあげてください、その結婚が心地よいものとなろう、最初のそれが姫にもあなたにも悲しいと同じに次にポリュネイクスの言い分を聞いてみよう 4)。

- 1) 義父が彼の帰国を誓い、
- 2) 兄が先制を仕掛け、
- 3) 彼は最も近しい者の挑戦に応じてやむなく槍を取った。
- 4) 追放の身の情けなさは同じ、
自由にもものが言えず、権力者の愚行に耐え、貧困に喘いできた。
- 5) 富を求めて何が悪いだろう。
- 6) 実の父の呪いを避けるため、一年毎の共同統治を決めながら、裏切られた。

しかし、妻であるアルゲイアは名前さえ触れられていない。

- 1) 獣のように奪い合ったすえ、
 - 2) 結婚は義父が神託によって認めた。
- 遺言は母にして姉であるイオカステに、

母上、われわれの命運は尽きました、わたしを祖国の土に埋めて下さい、あなたの手でわたしの顔を閉じさせてください

ポリュネイクスはといえば、亡命の苦難は当人でなく母親の口を借りて述べられ 5)、

もはや自然の掟にはなんの力もありません

と断ずる。亡命の身のみじめさ、不正への怒りは共通でも、ポリニースだけが国家間の紛争の火種である自分を妻と義父から引き離そうとしている。ギリシアにはいくらでもふさわしい夫、婿がいるだろう。ギリシア人、ローマ人との決定的な違いはふたりに対する愛情の有無である。

| | ロトルー | エウリピデス | セネカ |
|-------|------------------|--------------|--------------------|
| 結婚の理由 | 恋愛 | 神託、貧困 | 貧困 |
| 妻の性格 | 類い稀な 美德を備えた | 不平はない | 裕福、勝手気まま 情け容赦ない |
| 義父の性格 | 賢い、義に厚い 善意、忍耐 | 野心的 誤った好意 | 横柄 奴隷扱いする |
| 遺言相手 | 妻、義父 | 実母 | (実母) |

このポリニースを真に忌まわしい人物と評価した校訂者に賛同するなら、

- 1) プライドばかり高く、

- 2) 婚家のためだけを考え、
 - 3) 女ひとりと引き換えに祖国を売り、
 - 4) 親の情を知らず、長幼の序を弁えない愚か者
- ということになる。だが、裏返せばすぐにわかるように、
- 1) 貧困に負けることなく生まれに見合う誇りを保ち、
 - 2) 生まれ(自然)より、恋と恩情の契約で結ばれた誓いを取り、
 - 3) 正義のために敢えて祖国に弓を引いて、
 - 4) 自分が死ぬことで紛争を決着しようとした

のではないか。でなければ、何故、妹、アンティゴヌをこれほど苦しめることができるだろう。彼がつまらない反逆者、兄殺しなら妹の嘆きはただ埋葬が兄妹の情に背く、それだけの理由にかかると。妹にとって、慕われつつ国を治める長兄よりなお、彼が愛すべき人だからこそ、失われることを恐れ、亡くした後の悲しみが深いのではないか。ポリニースにあってエテオクルにないものは何か。妹もまた、こののち敵対者の息子となるエモンを恋する身である。ソフォクレスのアンティゴネにはハイモンがいた。当然、妹は義姉、義父への遺言を知らない。しかし、兄がどんな人物であるかは知っている。義姉、アルジーの嘆きはアンティゴヌの嘆きに反響する 6)。

ポリニース、お父さま、あの薄情な方を止めて、あの方が定められた死の時を遅らせて、せめて別れを惜しむいとまがあるように、そうしなければならぬ。涙もためいきもいらない、声を押し潰してしまうから

第二幕、第二場、城壁の高みから兄を認めて声を上げる 7)。

ポリニース、もっと前へ、お顔を見せて、一年もたってからやってきた妹を許してください、不幸せなわたしにほかに手だてはあるのでしょうか、どんな因果でわたしたちはこんなに隔てられているのでしょうか、妹がようやく兄にまみえたというのに、つきなみな挨拶さえできない、ただ一度、抱き合うことも許されぬとは、まるで敵同士のように話している

エテオクルと同等の分別をもって、プライドと正義、理性を盾に長兄を糾弾するポリニースに、再び、

不幸せなわたしがひざをついてお願いするのです、ご自分のためでなく、わたしのためを思って、どうか

兄の答えは妻への答えに似る。

この世に心残りがあるとしたら、あなただけがそれを取り除いてくれよう。愛しい妹、むしろわたしを罰するがよい、わたしの気持ちが意に添わぬと言われるよりはまし、来てわたしからこの剣を取り上げ、そうだ、来なさい、すぐさまこれでわたしの胸を突き、死なせ

てくれ、あなたに対するわたしの敬意は墓にまで及ぶだろう、わたしは生きて仇を打つことはできまいから

エウリピデスとセネカの、プライド、正義、家族の血にまみれた悲劇は恋愛感情と恩情に報いることなしには正当化されない。生きているポリニースは恋する人としてアンティゴヌの同調を受け、悲劇の前半を彼女のものとし、後半、ソフォクレスに倣いつつ、兄亡き後の妹の悲恋をその不在、欠如によって導いて行く。彼の果たした役割は単なるつなぎ目ではない。悲劇の全体をアンティゴヌの恋愛に注ごうとするとき、どうしても必要な存在だったのだ。そしてエウリピデス、セネカは名を呼ばず、ソフォクレスは触れさえしない妻が妹に決別の意味を伝えにやって来る。妻はアルゴスの王女アルゲイアではなく、アンティゴヌの義姉、アルジーと名付けられた。

III. アルジー/アンティゴヌ

アルジーは、構成要素を先行三作品に对照して、3) ロトルーに固有の要素のうち 1/2 にかかる人物で、作者が特に舞台に乗せるだけの価値があると認めた女性である。レシの文中に示すのでは足りず、アンティゴヌの同調を呼ぶ、恋する人ポリニースの恋を語らせるために身体を与えられた。セネカは息子たちの仲裁にむかう最も不幸な母親、イオカスタにこう言わせている 1)、

自分が罪ある者であることは、それほど罪深いことではありません。このわたしは、自分以外の人間をも罪ある者にしてしまったのです。いえ、そのことも、まだ軽い罪。わたしは罪ある者を生んだのです。が、わたしの苦難の数々に、ひとつ欠けていたものがあります、敵となった人を愛するという苦難が

その苦難が時を経てアルジーに科せられる。夫は亡命者であったが、紛争の火種となる敵国の王位継承権がやむなくそうさせた。アンティゴヌの恋はアルジーの恋によって予め失われてしまった。第三幕、第六場、短すぎる別れの時に、涙とためいきで言葉をなくした彼女が語り始める 2)。

夫から命を奪う同じ死神が、わたしにはそれを求めぬか。並外れた不幸にあった自分の半身をカラスどもにさらし、死者に鞭打つ非道に従えと。既にポリニースはわたしを責めているにちがいない、いまさら名誉を受けられようか、人が拒んだものを。もしあの方がふさわしい扱いを受けぬとなれば、わたしが責めを負う、けれども時機を逸していま受けるのも、わたしの過ちなのです

愛しい方、なきがらに寄り添いさまよう霊がまだそこにいるなら、この務めを果せるよう、わたしを導いてください。ポリニースがポリニースを見いだせるように。あなたに会いたい、それだけでこの不吉な場所に来ました。もう一度、お姿を見せて

目の前に悲しみの現実が生きて、声を発する。第七場、明かりを差し出した暗闇の先にまだ見ぬ義妹、アンティゴヌが立っている 3)。

だれか死んだ人を嘆いているの、おなじ気持ちでやってきたのね、クレオンの怒りを避けて。それなら障りはない、名乗りましょう。ポリニースの昨日までの妻、今日は夫を亡くし、夜陰に乗じて最後のお務めを果しに来ました

義妹は夫の代わりに彼女を抱き締める。

アルジー、お義姉さまなのね、何というめぐりあわせでしょう、兄に会えぬ今となって、こうしてお目にかかる、むしろ悪い方へ定められているのでしょうか。兄はこの偶然をよろこんでくれるだろうに、義姉妹たちは。生きているあいだは隔てておきながら、死んだ後になって結び付ける。わたしの心は兄があなたをどんなに恋していたかわかっていたのに、あとに残され、妻でなくなって、やっと会えた。お引き合わせは同じ務めを果すため、アンティゴーヌの気持ちはアルジーに通じている

やがてアンティゴーヌは同じ言葉をエモンに言わせることになるだろう。それを知らず、今はポリニースの霊がふたりを夫、兄の代わりに抱き合わせる。アルジーはアンティゴーヌにとって死んだ兄の分身であり、アンティゴーヌはアルジーにとって夫の分身であるが、同時に、敵対者を愛する者として重なり合う。義妹を評してアルジーは、

亡くなってしまったというのに、そのお姿がある。まだあの方のながしかが生きて目の前にある、からだは同じお腹で育てられたのです、あなたがたはひとつの心、ひとつの魂、ひとつの血だった

だからアンティゴーヌの答えはポリニースの答えである。

お兄さまが亡くなってわたしがつらいのはゆえなきことではありません。生まれにまさって愛情こそがわたしたちを結び付けていたのです

だが、対面はクレオンの出現で早々に打ち切られ、ポリニースの遺骸を求めて退場する。

参りましょう、お兄さまに涙のお弔いを、わたしの血であった方に

わたしの魂であったあの方に

第三場、次に登場する時、それぞれ別の紐を寄り合わせて一本の縄を綯うように、ふたりは台詞を分け合い、接いでいく 4)。

いいえ、陛下、わたしは捕えられはしましたが、それを恐れてなどおりませんでした。正しい行いをするのに恐れる必要がありますでしょうか

非道な取り決めに背いたのはわたくしひとり、陛下、姫さまはお手を添えられたにすぎませんわ

まさしく、王たちに優る神々にお仕えするため

地を疎んじ、天に名誉を与えんがため

クレオンに脅迫を受ければ、

惨い死は望むところ

遅すぎるくらいです

そして道理を説かれ、

陛下は王笏が惜しくてポリニースさまを追い立てたのでしょ

何よりわたしはお兄さまを愛していた、だから情愛が神聖な行いをすすめたのです
ふたりで縋いだ言葉がアンティゴヌの首縊りの縄になる。

ではおまえに宿っているその愛とやらの忠告に従うがよかろう、死者たちのもとのポリ
ニースを愛するのだ、わたしの国ではなく

続く第四場でアルジーはアンティゴヌの実妹イスメヌに台詞を譲り、以降、舞台に姿
はあるものの話すことはなく、第五幕にはまったく登場しないから、物語はここで完全に
アンティゴヌに引き渡されるかたちになる。アンティゴヌが舞台にいない時には、恋
するポリニースの恋を語る相手となって彼女の代役を務め、その兄亡き後は自分の夫に成
りかわって妹の運命を指し示した。アンティゴヌの悲恋はポリニースの恋なしに、ポリ
ニースの恋はアルジーなしに仕組むことができない。アンティゴヌに用意された最後の
不幸は、繰り返すまでもなく、セネカがあのイオカスタにさえ不足だと言った、敵となった
人を愛する苦難である。セネカの果せなかった意志はアルゲイアにアルジーのからだを魂
を与え、イオカスタとアンティゴナを越える悲劇を完成させようとした。アンティ
ゴヌはふたりの娘に似て、オエディプスはアンティゴナを評する 5)、

おぞましいわが家であって、たぐい稀な孝心の鑑ともいふべきこれはどこから来たもの
であろう、一族の者とは似ても似つかぬこの娘は、いったいどこから

おまえだけが、わが家であって、敬虔の心を説くことができる

説得に努める妹を見上げてポリニースは 6)、

わたしの愛しい妹、信仰厚く賢き、エディプの血の誇り、その家の誉れである娘よ
と呼び掛ける。それより以前、妻と義父にテーブへの宣戦布告を正当化して、いかに気掛か
りなアンティゴヌも、決意を揺るがせない、試しにその名をあげている。死にたいと願う
オエディプスを引き留めるアンティゴナに 7)、

娘よ、なぜわたしの膝に取りすがって泣くのだ、なぜ、折れることをを知らぬ者を、その
ように懇願して折れさせようとする、これこそ、運命がわたしをとらえることがことので
きる、わたしの唯一の弱点、ほかの者ならば、けっして折れることのないわたしだが。この
辛く厳しい気持ちを、和らげられるのは、おまえ一人だ

ポリニースの最後の抵抗はこうであった、

この世に心残りがあるとしたら、あなただけがそれを取り除いてくれよう。愛しい妹、む
しろわたしを罰するがよい、わたしの気持ちが意に添わぬと言われるよりはまし、来てわ
たしからこの剣を取り上げ、そうだ、来なさい、すぐさまこれでわたしの胸を突き、死なせ

てくれ、あなたに対するわたしの敬意は墓にまで及ぶだろう、わたしは生きて仇を打つことはできぬのだ

そしてオエディプスの抵抗は8)、

おまえが忠実な供なら、この父に剣を渡してくれ、それもわが父を殺害したことで隠れもないあの剣だ

わたしには、何であれ、辛くも、悲しくもない、おまえの望みだとわかるものなら。おまえは、ただ命じさえすればよい。(中略)おまえの命とあれば、生きましょう

こうしてアンティゴナが、ウェルギリウスの引用、敗者にとっての救済は生き恥をさらすことではなく、命を救われないこと、すなわち死である、が乗り越えられ、救済としての死を諦めさせる根拠になる。最大の処罰9)、

死にたくない者を死なせるのも、死に急ぐ者を妨げるのも、同罪だ。死を望む者に、死ぬなというのは殺すに等しい。いや、同罪ではない。思うに、死に急ぐ者を妨げるほうが、罪は重かろう

アンティゴナは自分自身は無垢な乙女であって罪人ではないが、敬虔さのためにイオカスタの言う第二の罪、自分以外の人間を罪人にするという過ちを犯している。父は死んで汚名を晴らすことが叶わず、罪人のまま苦痛に身をさらす。すると、乙女は既に無垢ではなかったのだ。イオカスタとアンティゴナは息子と父の説得に成功し、ジョカスト、アンティゴヌ母娘の仲裁はむしろ兄弟の対立を際立たせ、死なせてしまう。信仰厚きアンティゴヌは敬虔なアンティゴナの罪を免れる。ポリニースは死んで妹の信仰を護ったことになる。オエディプスが断ち損なった禍根は、エテオクレスではなく、ポリニースが身を捨てて絶やし、アルジーのアルゴスはテーバエの轍を踏まずに済んだ10)。

父を殺して得た王笏を、わたしは捨てた。だが、その王笏は、今また、別の者の手に握られている。わが王国の宿命は、ほかならぬ私が、一番よく知っている。あの王笏を手にする者は、聖い血を流さずにはおかないのだ。父親のわたしの心は、はや、大きな不幸が持ち上がることを予感している。やがて起こるその災厄の種はすでに蒔かれた

悪しき間借り人のわたしは呪われた土地から恋の名のもとに戦いの種をもたらした。あなたの家とわたしが共に掲げた婚礼の炬火は運命に火を点け、あなたがたのすべてを焼き尽くす

アンティゴナは自分を指して、哀れな娘、と言いながら父の同情を引く。アンティゴヌもそうだ11)。

不幸せなわたしにほかに手だてはあるでしょうか

不幸せなわたしがひざをついてお願いするのです

この哀れさと不幸の質は異なる。信仰のために罪を犯すことはないが、代わりにその愛情が恋する相手を死なせる。彼女はオエディプス、イオカスタの娘、エテオクレス、ポリュニ

ケスの妹である以上に、エモンの恋人であった。死によってのみ証明される対象を際立たせるのに、他の罪は無用だろう。ソフォクレスはアンティゴネに語らせた 12)、

わたしは憎しみをわけるのではなく、愛をわけると生れついた

と。しかし、すでにポリネースとアルジーを失ったアンティゴヌには共に愛をたたえて歌ってくれるコロスはいないから、孤立無援の戦いが始まる。

- 1) 兄への愛情から、死ななければならない
- 2) エモンを思えば死ぬことはできない、必ず後を追うだろう
- 3) そうなれば愛する人を殺してしまう
- 4) 愛する人を殺すのは愛ではない
- 5) 生きることが良いことだから
- 6) しかし、もし後を追わなければふたりの愛情は偽りになる
- 7) 兄の犠牲を無視して生きていけば、エモンは自分を疑うだろう
- 8) そんな自分を愛する人ではない
- 9) もし愛するなら、自分はエモンを疑う

結局、愛は失われる。エモンがアンティゴヌを愛する条件のひとつが彼女の兄に対する敬愛、愛情であることが問題だ。二つの愛が互いにリンクしあい、選択を拒否する。セネカに似たような展開があったのを思い出されよう。かつては死の断念が生きて償う救済への道を開いた。いずれにせよオエディプスの願いは遂げられるだろう。もしいま、オエディプスの最初の願いを聞き届けてやるとすれば、5) 生きることが良いことだから、を外せばよい。生きてみすみす愛を失うのを見るくらいなら、死んで現世での成就が叶わない、という意味で失う方が心安い。たとえ愛する人を殺し、彼に親不孝をさせる罪を着ることになっても、その罪はひとり、自分にある。同様の論理をエモンが組み立てる予測は簡単につけられる。クレオンが宣告した通り、実はその愛情とやらが彼女を不幸にしているのは明らかなのに、自ら称してためらわない、不幸な娘、すなわち運命に敗れた者は、ウェルギリウスが言うように、命を断ってやる方が救いなのだ。論理上の重大な誤りが隠れていることにお気づきだろう。アンティゴナは父に言ったはずだ 13)、

勇氣とは、お父さま、お父さまのお考えのように、生を恐れることではありません。むしろ途方もなく大きな不幸に立ち向かい、背を向けたり、逃げ出したりしないことこそ、本当の勇氣というもの

愛なしに生きることができないアンティゴヌは勇氣より愛を選ぶ。イオカスタの末裔として敢えて罪を犯し、愛を護るために死ぬが、それはまた救済の死である。ここで愛と死と救済は等号で結ばれる。それ自体が事の発端、原因だったのを忘れて、愛こそが不幸の連鎖を断ち切るというわけだ。ロトルーはセネカが残したディレンマをウェルギリウスの教訓に従って展開してみせた。そこには校訂者に倣うべきいくらかの理由はある。だが依然

としてアンティゴヌの言う愛が何であるかは不明だ。死の周辺を取り巻いていた恐怖が愛を囲んではりめぐらされ、転嫁されただけではないのか。恋することを知らず死を選んだ、若きメノイケウスの自己犠牲を彼女は何と名付け得ただろう。

(つづく)

注

はじめに、I

- 1) 拙論、ロトルーのプラウトゥス三部作について、1997年、エイコス XI
- 2) 同、ドン・ベルナルド・カブレールにおける paraître の勝利、1994年、エイコス VIII
- 3) Viollet-le-duc: Oeuvres de Jean Rotrou vol. IV. Notice. pp. 3-5. 1967. Slatkine Reprints.
- 4) 鈴木美穂、梗概、1990年、エイコス VI. 80-81 頁

H. C. Lancaster. French dramatic literature in the 17th century. Part II. vol. 1-2. pp. 154-156. 167. 183. 322. 335. 416. 597. 772. 1932 (1966) Gordian Press Inc. New York.

ソフォクレス、呉茂一訳、アンティゴネ、1986年、ちくま文庫、ギリシア悲劇 II、ソポクレス、147-218 頁

エウリピデス、岡通男訳、フェニキアの女たち、同 IV、エウリピデス(下)、255-343 頁

セネカ、大西英文訳、フェニキアの女たち、1997年、京都大学学術出版会、セネカ悲劇集 I、185-242 頁、以下ではエウリピデスと区別するためテーバエの女とする

- 5) セネカ、195 頁、訳者注
- 6) 同、訳者解説、442-447 頁

II.

- 1) ロトルー、前掲同所
- 2) セネカ、218-219 頁、イオカスタ、380-390 行
- 3) ロトルー、17-20 頁
- 4) エウリピデス、277-278 頁
- 5) セネカ、218 頁、370-378 行、226 頁、476 行目
- 6) ロトルー、20 頁
- 7) 同上、22 頁

III.

- 1) セネカ、217 頁、367-369 行
- 2) ロトルー、47 頁、48 頁
- 3) 同上、49、50、51 頁

- 4) 同上、第四幕第二場、23 頁
- 5) セネカ、193-194 頁、304-310 行
- 6) ロトルー、第二幕第二場、23 頁
- 7) セネカ、212 頁、304-310 行
- 8) 同上、196 頁、100-110 行、212 頁、310-315 行
- 9) 同上、195 頁、90-100 行
- 10) 同上、210 頁、275-280 行
- 11) 同上、202 頁、180-190 行、ロトルー、22、24 頁
- 12) ソフォクレス、176 頁
- 13) セネカ、203 頁、190-200 行

*後半は 2000 年 3 月刊行、中大仏文研究第 32 号に掲載予定